

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第31号

目次

ロシアにおけるアーキビスト養成の《旗艦》
—ロシア国立人文総合大学歴史アーカイブズ学院—
パールィシェフ、エドワルド…… 2

企画展紹介：
京都大学における女性
—帝国大学時代から 1950 年代まで—
元（ウォン） ナミ …… 4

日誌…………… 6

大学文書館の動き：
法科大学時代の卒業証書を
ご寄贈いただきました…………… 7

人の動き…………… 7

昭和天皇の水族館見学
富永 望 …… 8



初代附属図書館の閲覧室（1909 年ごろ）

京都帝国大学の附属図書館が閲覧業務を始めたのは 1899（明治 32）年 12 月からであった。当時の附属図書館は、現在の附属図書館（3 代目）より北側、ちょうど教育学部のあたりに位置していた。閲覧室は文部技師真水英夫の設計とされ、窓枠のアーチが特徴的である。学生数がまだ少ない頃には式典や講演会などにも使われたが、1936（昭和 11）年の火災によって焼失した。

ロシアにおけるアーキビスト養成の《旗艦》 ——ロシア国立人文総合大学歴史アーカイブズ学院——

筑波大学図書館情報メディア系助教 バールイシェフ、エドワルド

ロシアにおけるアーキビスト養成の源泉はロシア帝国期に発見しうるが、アーカイブズ管理とともにそれが制度化されたのは、ソ連初期においてである。ロシアのアーキビストたちの多くはボリシェヴィキ政府の1918年6月1日付けの「文書管理の再組織化および中央化に関する法令」を近現代的な制度の始まりとして受け止めていると同時に、1930年におけるモスクワ国立歴史アーカイブズ学院（Moskovskii gosudarstvennyi istoriko-arkhivnyi institut, MGIAI、あるいは略してIAI）の創設を現今のアーキビスト養成制度の基盤として認識している。

1918年に宣言された文書管理の再組織化や中央化は、旧政府機関直轄の文書館が解散され、その所蔵記録がいわゆる「国家統一文書群」（yedinyi gosudarstvennyi arkhivnyi fond）と化したというところに第一に表れた。いわば、官立・私立の組織のすべてとその不動産も「国民（営）化」された結果、全国各地の現用・非現用記録は国家資産になった。こうした文書的な国家資産の総合管理は同じ法令によって教育省内で創設されたアーカイブズ管理総庁（Glavnoe upravlenie arkhivnym delom）に一任された。こうして、連邦共和国の国立中央文書館、州都市などにおける国立文書館、国営企業やあらゆる組織における文書課（アーカイブ）がつくられ、中央国家記録管理体制が次第に構築された。

当然なことに、「国家統一文書群」を管理するには専門的な人材が必要であったが、1917年革命によって登場した革命政権は旧世界を破壊したうえで新世界の構築を目指していたため、サンクトペテルブルグおよびモスクワにおいてアーカイブズに造詣の深い専門家たちを育成していた二つの私立考古学学院も1922年に解散させられた。

その後、五か年計画などで特徴づけられる

《集団化》と《工業化》というロシア史のドラマ的な時代の真最中の1930年にはついに歴史アーカイブズ学院が創設されたが、それは正にソ連におけるアーキビスト養成制度の土台となった。革命政権の目標は新しいマルクス・レーニン主義に親近感を有する《赤いアーキビストたち》をつくることにあったため、アーキビストという専門職は広い視野を有する研究者よりも、政治的な課題が与えられた記録管理者—あるいは当時、流行していた用語を使えば、《技師》—として再認識されたのである。自由な歴史学的な研究は共産党政権に対してイデオロギー的な脅威をはらんでいたので、共産主義思想へ親近感をもつ《歴史学者＝アーキビスト》という国家人材の養成方針は妥当性を有していたに違いない。

共産党政権との歴史アーカイブズ学院の《近い関係》は、校舎として与えられたのが赤の広場のすぐ近くにある立派な歴史的な建築物であったということにも象徴的に表れた。この建物は1553年に建てられたロシア最古の印刷所の場所にあり、19世紀初頭以降、約1世紀にわたり機能していた最高宗務院印刷所という重要な文化遺産のものであった。以上のような政治的な背景もあって、歴史アーカイブズ学院はソビエト連邦を構成する各地域だけではなく、東欧諸国や中華人民共和国などの《社会主義陣営圏》のアーカイブズ学、記録管理事業の在り方やアーキビスト教育に莫大なインパクトを与えた。

情報へのアクセスがイデオロギー的な利用で厳しく制限された時代が1980年代末期に幕を下ろした後、ロシア国内のアーカイブズ管理体制やアーキビスト養成体制は大きく変化してきたが、歴史アーカイブズ学院は今日も記録管理事業やアーキビスト養成において指導的な役割を果たしている。

1991年、歴史アーカイブズ学院を基盤にしてつくられたのは、現今のロシア国立人文総合大学（RGGU）である。歴史研究者＝アーキビストという専門職にみられる学際的なヴィジョンおよび人文学的な普遍性、博物学主義と専門主義の両立という考え方は新設された大学の中心的な構想となった。

RGGUは10の教育研究センター（学院）から構成されているが、歴史アーカイブズ学院はそのひとつである。この学院には、①最大の規模を誇っているアーカイブズ管理学部、②歴史・政治学・法律学部、③記録学・電子アーカイブズ学部という三つの学部のほか、社会人向けの記録学・アーカイブズ学学部、郷土研究・歴史文化的な観光および国際関係・国外地域研究という二つの学科が含まれている。学院の付属にはアーカイブズ研究センターがあり、夜間教育や通信教育も依然と実施されている。IAIの研究活動の成果は1939年から刊行されている『歴史アーカイ

ブズ学院紀要』（"Trudy Istoriko-arkhivnogo instituta"）などに表れている。

アーカイブズ管理学部にはアーカイブズ管理史、アーカイブズ学、古文献学、史料学・歴史補助科学、歴史一般、中世・近代前半ロシア史、近現代ロシア史という講座が機能しており、90人の教員が在職している。また、2013年に記録学部および電子アーカイブズ学部が合併してできた記録学・電子アーカイブズ学部には、ドキュメント学、国家機関・社会团体史、記録管理の自動システム、科学史・科学技術アーカイブズ・音声動画アーカイブズなどの講座がある。

一見すれば、ロシア国立人文総合大学の創設とともに歴史アーカイブズ学院は学部まで格下げされたようである一方、この激動期のなかでロシアにおいてアーカイブズ学やアーキビスト養成の継承性が保たれ、更なる発展への基盤の構築がなされたことを肯定的にも評価できるであろう。RGGUの著名なホルホルディナ教授の言葉を借用すれば、五か年計画期の《みにくいあひるの子》として生まれ、《捨て子》のように苦しい少年・青年期を生きてきた学校は、いつの間にか世界最高規模のアーキビスト養成機関までに成長できた。歴史や歴史記録にロマンを感じている、もしくは記録管理といった重要な事務に関わる仕事に関心を覚えている若者は今日も歴史アーカイブズ学院への入学を目指している。

参考文献

- ① Khorkhordina T. I., Korn i krona: Shtrikhi k portretu Istoriko-arkhivnogo instituta (1930-1991) (Moskva, 1997).
- ② Khorkhordina T. I., Gumanitarnyi universitet v Moskve: Istoriya idei (Moskva: RGGU, 2012). - 295 p.
- ③ Lanskoi G. N., "Trudy istoriko-arkhivnogo instituta" kak istoriograficheskii istochnik, Novyi istoricheskii vestnik (No. 36, 2013), pp. 80-88.



モスクワの赤の広場のそばにある歴史アーカイブズ学院の本館
(筆者による撮影)

企画展紹介

京都大学における女性 —帝国大学時代から 1950 年代まで—

京都大学大学文書館助教 元(ウォン) ナミ

大学文書館では、2016 年 11 月 15 日（火）から 2017 年 1 月 15 日（日）まで、百周年時計台記念館歴史展示室において、企画展「京都大学における女性—帝国大学時代から 1950 年代まで—」を開催します。

1945 年 12 月 17 日、衆議院議員選挙法が改正され、女性の国政参加が認められました。その直前の 4 日、「女子教育刷新要綱」が閣議諒解されました。それまで例外的だった女性の大学入学が広く受け入れられるようになり、京大でも正規の学生として初めて女性が入学するようになりました。

それから 70 年、女子教育の門戸開放が実現した前後に、京都大学で活動していた女性たちについて、当館所蔵の法人文書や個人寄贈資料、報道資料等を手がかりに、その軌跡を追っていく展示を企画しました。展示は、①京都帝国大学における女性に対する教育、②京都大学で研究と教育の道を切り開いた女性たち、③戦後の女子学生の入学と大学生活、の大きく 3 つのテーマに区分しています。

テーマ 1 京都帝国大学における女性に対する教育

ここでは戦後の教育改革と女子教育の門戸開放が行われるまで、京大の中で女性はどうのように活動していたかを紹介します。また、「女子教育刷新要綱」の制定と米国教育使節団の来学への京大の対応についても取り上げます。

女子学生に門戸を開放したのは東北帝国大学が初めてでした。1913 年のことです。その後、しばらくは正規の学生としての入学がありませんでしたが、1923 年以降文部省の認可のもと、女子学生の受入が他大学でも始められました。また、その間、聴講生、選科生、専攻生等としても女性が受け入れられ男女共学の大学体制づくりが少しずつ進められていきました。

敗戦直後の教育改革に伴い、1945 年 12 月「女子教育刷新要綱」が閣議で諒解され、男女間の教育の機会均等が促進されます。それまで正規の学生としての女性の入学者がいなかった東京帝国大学と京都帝国大学も、女性を学部学生として受け入れるようになりました。

しかし、それまで京大構内で女性の姿が見られなかったわけではありません。1899 年には医科大学附属医院看護婦見習講習科（現、医学部人間健康科学科）が設置され、女性の看護婦講習生が教育を受けていましたし、雇として大学に勤める女性も少なくありませんでした。1919 年には医学部の選科生として初めて 2 人の女性が入学し、その後も専修科生等の女子生徒が教育を受けていました。さらに 1931 年からは博士学位取得のために研究指導を受けた女性もいました。



当館所蔵の学位授与関係書類と教育職員進退関係書類。帝国大学時代の女性研究者への博士学位の授与や、初期の女性職員の任免について記載されている。

テーマ 2 京都大学で研究と教育の道を切り開いた女性たち

現在、京大の正規の女性教員の場合、教授、助教授、講師、助教を含めても、その数は全教員の 1 割にも達していません（教授 6.7%、准教授 9.8%、講師 15.4%、助教 12.7%、計 9.8%。ただし、特定有期雇用の場合、教授 4.9%、准教授 15.5%、講師 18.8%、助教 24.7%で、計 20%、以上 2016 年度現在。京都大学 HP 内「データで見る京都大学」より）。

しかし、1954年に初めて女性の助教授が、1970年に初の女性教授が誕生した事実からみると、京大にも徐々に女性研究者が増えていくといえます。

ここでは、戦前から戦後にかけて京大で研究と教育の道を切り開いた研究者4人を取り上げます。当館所蔵の進退書類から浮かび上がる4人の略歴は、以下の通りです。

・フロラ・アリス・リリエンフェルト (Flora Alice Lilienfeld, 1889～1977) ポーランド出身で農学部において遺伝学の実験を担当。1929年から1936年まで講師として在職。

・三浦 アンナ (Anna Miura-Stange, 1894～1967) ドイツ出身で文学部講師として1932年から1957年までドイツ語、ドイツ文学を担当。

・木村 静子 (1929～) 1947年に女子学生2期生として法学部に入学し、1953年に法学部講師、1954年に京大最初の助教授となり、1968年まで刑法各論、ドイツ法第一講座分担等を担当。

・柳島 静江 (1924～) 1946年に理学部に入学し、1953年に理学部助手、1962年の教養部助教授を経て、1970年に京大初の女性教授に昇格。

テーマ3 戦後の女子学生の入学と大学生活

1946年2月に文部省学校教育局長から、各地方長官・学校長に対し、昭和21年度大学入学者選抜要項が通牒されます。旧制高校のほか、男女専門学校本科、高等女学校高等科、男女高等師範学校等の卒業生（見込みを含む）にも大学受験資格を付与することになり、同年4月15日、京大で初めて男女共学の大学入試が行われ、入学者1505名中17名の女子学生（文12、理2、法1、経済1、農1）の入学が決まりました。

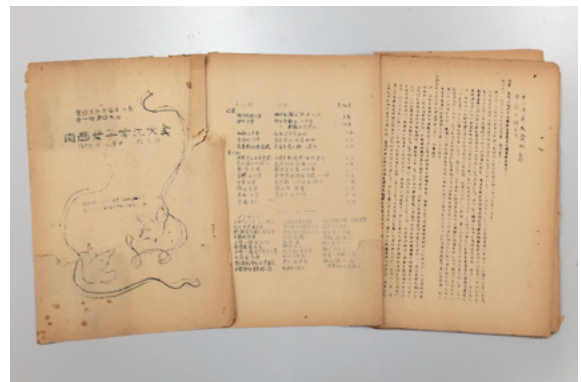
今はどの大学でも女子学生の姿を見るのが普通のことでしょうが、京大においては初めて女子学生が入学した1946年以後もその数が全学生の1～2%しか占めない状況でした。1960年代半ば頃になってからやっと全学生の中で5%程度の女子学生が在籍するようになりました。

女子学生はこれまで学んできた女学校、女子高等教育機関での教科内容や語学水準の相

違のため、大学入試の準備から苦労したようですが、入学した後も男子学生と同等な授業を受けるために語学や基礎勉強に多く時間を割かなければなりませんでした。

また、女子学生の受入は始まったものの、設備面を始め大学側の態勢は十分なものとはいえませんでした。特に遠方から来た女子学生の住居の問題は深刻でした。

1951年、京大女子学生懇談会が結成され、大学施設の拡充、女子寮建設等の要求など活発な活動を続け、一連の成果を上げています。さらに当時、女子学生が直面していた様々な問題を他大学、地域の団体とも連携し、政治、社会問題としてもとらえる動きもありました。



1953年11月6・7日に京都大学と同志社大学で開催された関西女子学生大会のパンフレット。

その一方で彼女たちは学内では真剣に学問を探究し、専攻の学友たちとも交流を深めながら大学生活を楽しんでいたと考えられます。

京大における女性を本格的に取り上げる企画展は今回が初めてです。今回の準備の過程で当館が所蔵する女性に関する史料の少なさを改めて実感しました。それでも、学内外の方々のご協力を得て、京大における女性について考えるきっかけになり得たのではないかと思います。

多くの方々のご来場をお待ちしています。

[日誌] (2016年4月～2016年9月)

2016 年

- 4/ 4 西山教授、新採用職員研修において京都大学の歴史について講義。
- 4/ 6 学内より、学徒出陣図、出陣学徒数等について照会。
- 4/ 5 日新電機（株）より、京都大学正門と理工科大学本館の写真について照会。
- 4/11 宮田淳氏より、三浦百重元教授の肖像画 1 点寄贈。
- 4/12 相阪滋氏より、相阪竹松関係資料寄贈。
- 4/13 大阪市立大学より、戦後直後の宇治キャンパス関連資料について照会。
- 4/13 大学文書館教員会議。
- 4/18 菊池寛記念館より、上田敏の写真について照会。
- 4/18 学外より、留学生の在籍記録について照会。
- 4/19 読売新聞社より、西部講堂の歴史について照会。
- 4/24 元助教、日本アーカイブズ学会（於・東京外国語大学）で「イギリスにおける地方公文書館の創設と現在の課題：ベッドフォードシャー（Bedfordshire）の事例を中心に」と題して研究発表。
- 4/25 学外より、渡辺秀方について照会。
- 4/28 『京都大学大学文書館だより』第 30 号発行。
- 5/ 2 長崎新聞社より、藤浪鑑関係資料について照会。
- 5/ 6 京都新聞社より、京大俳句について照会。
- 5/ 9 国立科学博物館より、「タイガー計算機」の写真について照会。
- 5/13 西山、三高同窓の集い（於・新都ホテル）において「第三高等学校資料と京都大学大学文書館」と題して講演。
- 5/16 京都大学新聞社より、河上肇と国際交流館の写真について照会。
- 5/18 大学文書館教員会議。
- 5/19 西田幾多郎記念哲学館より、時計台記念館歴史展示室に展示中の「講義ノート」について照会。
- 5/28 元、記録管理学会（於・東京堂ホール）において、「アメリカにおける地方公文書館の創設と現在の課題」と題して研究発表。
- 5/30 法人文書管理等に関する研修会を開催。
- 5/30 学内より、昭和 38 年入学者のクラス別名簿について照会。
- 5/30 NHK より、京都大学音楽部交響楽団の楽団練習場が焼失した時の写真について照会。
- 5/31 NHK より、原爆展関係資料について取材のため来館。
- 6/ 1 学内より、京都大学音楽部交響楽団関係写真について照会。
- 6/ 9 京都大学音楽部交響楽団より、『京都大学音楽部

交響楽団七十五年史』寄贈。

- 6/13 学習院大学大学院より、大学文書館の施設見学のため来館。
- 6/15 NHK より原爆展について取材のため来館。
- 6/15 大学文書館教員会議。
- 6/16 同志社大学大学院より、大学文書館の施設見学のため来館。
- 6/16 海外より、京都帝国大学時代に寄贈された景教碑の所蔵状況について照会。
- 6/21 日本経済新聞社より、須田国太郎「学徒出陣図」について照会。
- 6/27 学外より、留学生の在籍記録について照会。
- 6/21 京大生協より、歴史展示室に展示中の「吉田山から見た景色」の写真について照会。
- 7/ 1 学内より、京大端艇部の設立時期について照会。
- 7/ 4 学外より、関西の大学生の学年を「回生」という理由について照会。
- 7/ 4 創元社出版事業部より、京都大学地震観測所の写真について照会。
- 7/ 5 NHK より、原爆展関係資料の取材のため来館。
- 7/ 5 富永助教、ILAS セミナー「アーカイブ資料管理の実践」の受講生に大学文書館の資料説明と施設案内。
- 7/ 7 那波邦彦氏より、大学紛争関係資料寄贈。
- 7/10 学外より、留学生の在籍記録について照会（～7/12）。
- 7/11 学外より、学徒出陣と出陣学徒関係写真について照会。
- 7/14 大学文書館教員会議。
- 7/19 経済学部経済資料センターより大学文書館の施設見学のため来館。
- 7/26 学外より、劇団創造座のパンフレットについて照会。
- 7/26 国立民族学博物館に、村岡範為教授らが初期に撮影した X 線写真を貸出。
- 7/27 藤女子大学より、大学文書館の施設見学のため来館。
- 8/ 1 藤井綾氏より、河上肇からの手紙他寄贈。
- 8/ 1 学内より、法経本館周辺の石碑や植栽関係資料について照会。
- 8/ 1 京都新聞社より、花谷会館の由来等関係資料について照会。
- 8/ 2 野生生物研究センター主催展示「マナスル 60 周年探検からサイエンスへ」に企画展示室貸出（～9 月 4 日）。
- 8/ 2 西山、筑紫高等学校アカデミックツアーで「大学って何をするところ？—近代日本の歴史から考える—」と題して講義。
- 8/ 4 東京大学文書館より、大学文書館の施設・業務

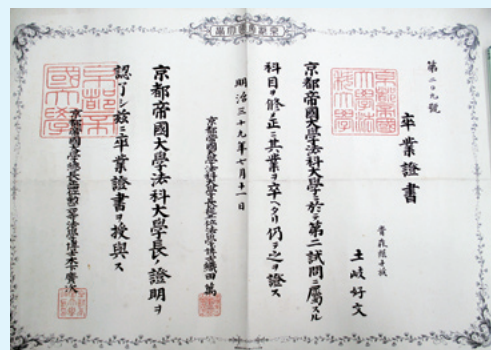
- 視察のため来館。
- 8/ 5 学内より、京大端艇部の設立時期について照会。
- 8/ 8 竹部瑩氏より、戦後学生運動関係資料寄贈。
- 8/ 9 学内より、時計台周辺の植樹関係資料について照会。
- 8/ 9 オープンキャンパス 2016 開催（～10 日）。
- 8/12 学内より、木下広次博士銅像除幕式関係書類について照会。
- 8/19 立教大学共生社会研究センターより、大学文書館の施設見学のため来館。
- 8/24 学外より、永瀬狂三写真集及び履歴書の所蔵について照会。
- 8/26 NHK より、原爆展関係資料の取材と撮影のため来館。
- 8/26 神戸大学大学文書史料室より、神戸病院写真について照会。
- 9/ 5 大学文書館教員会議。
- 9/ 6 企画展「京都帝国大学の「大学自治」」開催（於・

- 百周年時計台記念館歴史展示室、～2016 年 11 月 6 日）。
- 9/ 9 元、国際公文書館会議（ICA）国際公文書館大会（於・韓国ソウル COEX）において、「Processing a Wealth of Digitized Objects with Limited Resources: Steps for Success in U.S.-Japan Collaborative Project」と題して共同研究発表。
- 9/14 西山、大阪大学法人文書管理に関するセミナー（於・大阪大学吹田キャンパス）において「国立大学におけるアーカイブズ—これまでとこれから—」と題して講演。
- 9/20 韓国国立劇場より、大学文書館の施設見学のため来館。
- 9/27 稲垣道子氏より、京都帝国大学法科大学卒業生の卒業証書寄贈。

大学文書館の動き

法科大学時代の卒業証書をご寄贈いただきました

当館はこのたび京都帝国大学法科大学時代の卒業証書をご寄贈いただきました。日付は 1906（明治 39）年 7 月 11 日、卒業を証明する法科大学長（現在の法学部長）と、それを認了した総長の名が並んでいます。よく見ると、証書に「第二試問ニ属スル科目ヲ修メ」とあります。実は、この時期の法科大学は学科制を廃止し、4 種のコース制を採っていました。また、従来の 4 年制を 3 年で修了できるような制度を設けていました。しかし、東大とは異なった個性をもつべく始められたこの制度は、この翌年、わずか 4 年で幕を下ろします。この証書は、その短い間の京大法科の試みを示す貴重な史料です。



人の動き（2016 年 4 月～2016 年 9 月）

2016 年 4 月 1 日 元ナミ、大学文書館助教に就任。

昭和天皇の水族館見学

京都大学大学文書館助教 富永 望

京都大学が有する研究施設の一つに、フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所(和歌山県西牟婁郡白浜町)がある。一般には、所内にある京都大学白浜水族館の方が有名かもしれない。2015年3月現在、662種8,729点の生物を飼育する水族館である(『京都大学瀬戸臨海実験所年報』第28巻)。

1962年5月19日から26日にかけて、昭和天皇は香淳皇后を伴い、三重県・和歌山県に行幸した。伊勢神宮参拝と両県の視察が目的だったが、タイトなスケジュールの中、23日は静養日にあてられ、天皇・皇后が実験所を見学を訪れた。これに関係する資料が大学文書館に保管されている(01A01313『皇室関係書類 自昭和37年5月』)。

2月28日付で和歌山県知事小野真次から京大総長平沢興宛に書簡が送られ、和歌山県への行幸啓が内定したことを知らせるとともに、「和歌山県奉迎準備委員会」に京大から委員1名を出すことを依頼してきた。京大では理学部の附属施設である瀬戸臨海実験所への行幸啓が日程に含まれていたことから、理学部長宮地伝三郎教授を委員に推薦したのである。

京大では天皇を迎えるにあたり、3つのプランを用意した。第1案は午前中に水族館見学と委託研究についての報告、午後は2時間半にわたって京大の研究者による研究発表という内容だった。委託研究とは、天皇が相模湾で採集した生物標本の分類作業を瀬戸臨海実験所が代行したものである。第2案は午前中に水族館見学、午後は田辺湾に浮かぶ無人島の畠島で生物採集の後、委託研究の報告と研究発表を50分ずつ行う。第3案は午前中に委託研究の報告、午後は畠島で採集の後、研究発表を1時間半というものである。3案を比較してみると、委託研究の報告は、京大側が必須事項と考えていたことがわかる。そして京大の研究者としては、自分たちの研究発表を天皇にじっくり聴いてもらいたかった

のではないだろうか。研究発表の時間を最も長くとしたものが第1案とされていることから、彼等の願望が窺える。

4月13日に和歌山県庁で打ち合わせを行い、日程が内定した。その内容は、第2案をベースに、やや移動時間に余裕を持たせており、午前には水族館見学、午後は採集の後、1時間25分にわたって研究発表というものだった。静養日であることから、天皇の意向が反映されたとみてよいだろう。天皇は、委託研究の報告よりも、直接生物に触れる機会を重視したのである。なお、皇后は、水族館見学の後は別行動になっていた。

ちなみに、天皇は以前にも実験所を訪れたことがある。1929年6月1日、天皇は軍艦に搭乗して大阪・神戸へ行幸する途上、瀬戸臨海研究所(当時)へ立ち寄り、京大の研究者による説明を受けてから、畠島で採集を行った。水族館はこのときの行幸を記念して、翌年に開設されたものであった。天皇にとっては思い出の場所だったのである。

さて行幸当日、あいにくの雨で畠島での採集は中止となり、午前は水族館見学、午後に委託研究の報告と研究発表という雨天時の日程に変更された。天皇は水族館を熱心に見学して、予定時間より20分超過した。委託研究の報告は予定どおり聴取したものの、天皇が疲れを見せたことから、予定を切り上げて宿泊所に戻り、研究発表については後日書類を届けることになった。宮地教授をはじめとする京大の研究者たちは落胆したであろう。

一方で学内の反応は、33年前とは対照的であった。『京都帝国大学新聞』105号1929年6月3日付は行幸を1面で大々的に取り上げ、瀬戸臨海研究所への行幸がいかに意義深く、名誉なことであるかを報じている。ところが、1962年の『京都大学新聞』は行幸を一切記事にしていない。

京大生の皇室に対する意識の変化が窺えるエピソードといえよう。